

薰樹累物語

一九

八つ目

殖生村の段

〔解題〕 累かさね與右衛門を材題とした戯曲は歌舞伎にも淨瑠璃にも澤山あるが、「薰樹累物語」の外題で演じられたのは寛政二年四月廿七日の道頓堀東の芝居の竹本石之助座であつた。番附によれば、屋形の段、吉原の段、大門口の段（高尾殺し）、千本通の段、豆腐屋の段、祇園の段、屋敷の段、殖生村の段、絹川堤の段（累殺し）を出して居る。この丸本は見ないが、六行稽古本目録には、豆腐屋の段、殖生村の段、累殺しの段が掲げてあり、

後の操りの繰返しでも大抵は埴生村の段と累殺しの段とを出して居る。

前の番附面を見、又現存の稽古本によるに、これは疑ひもなく「伊達競阿國戯場」〔安永八年作、淨瑠璃名作集下、伽羅先代萩の解題の條参照〕の改題で、その九段目迄を出したのである。茲に収めたのはその八段目の埴生村與右衛門内の段の切で、原作の金五郎が鉦八、豆腐屋三婦が戸平と變つて居るくらゐで、他は殆んど同文である。

本曲の荒筋はかうである。足利頼兼が傾城高尾に惑溺し奸人が之に乗じようとするので、お家は破滅にならうとする。頼兼の恩顧を受けた力士絹川谷藏はこの禍根を絶たうとして高尾を殺した。その後谷藏は南禪寺前の豆腐屋三婦といふ高尾の兄の家に頼兼と共にかくまはれ、妹の累に想はれて夫婦となると、高尾の怨念の祟りで累は二目と見られぬ醜婦となつた。併し兄三婦の頼みもあり、又自分も因縁と諦めて谷藏は、累に鏡を見る事を嚴禁した。のち谷藏は與右衛門と變名して累と共に下總埴生村に世を忍ぶ身となつたが、惡人金五郎（鉦八）が頼兼の許嫁の歌方姫を身賣りしようとするを救はうとして百兩の才覺に窮するを累は代つて身を賣らうとして初めて鏡を見てその昔に變つた醜貌に驚愕悲觀して絹川に身を投げようとする。こゝで歌方姫と與右衛門との關係を誤解し、嫉妬の一念に高尾の怨念がのり移つて姫を鎌で殺さうとしたので、與右衛門は止を得ず累を殺す。都から尋ね上つた三婦がこゝへ來合せて、共に因果を歎くと共に、怨念退散して元の美貌に還つて往生した累の首を姫の身代りとする。これが九段目の終りである。十段目は例の先代萩の對決の場の原作となつた場面。

へさして立歸る。跡は思ひに花ぞ散かと。恨むであらう泣くである。兄の戸ら濟まぬ夫の顔。つい目に付くも惚れる。物思へとや入相の。鐘にせかるゝ百兩の。才覺何と與右衛門が。スエ思つても。一生見捨てまいと言つた女房。ちのいにかう顔の色も悪し。お前は何か胸の暮れ近く。フシ思ひ廻せば廻す程。御館の騒動故。一旦この絹川が御供して立退きしと。風聞せし頼兼公。都の内におはすとも。辨へなき姫君様。女心にはるゝと慕うてお出で遊ばしたか。何にもせよちよつとマア。お目にかゝつて。アイヤゝゝ。曲みに曲ん待兼ねさしやんせう。この在所の酒はの妨げと。それとは言はで。詞コレ累。だ鉦八め。絹川と知られては我が身の悪いと言はしやんすに依つて。隣村まで往て買うて來やんした。それはマアアノ鉦八には。親の代から百兩といに鉦八めを。追つかけて打殺し姫君のさうと鉦八さんは何處にちやえ。イヤふ借がある此の中からその金を。戻せ御供して立退くより外はなし。オ、さモ待兼ねて疾うに去んで了うた。エ、ゝゝといらだての催促。色々と言ひ延ちや。端さうちやと駈出すを纏ひ付く。前垂の紐思愛の。ホシ縁に引かる角買うて戻つた酒。そんならお前飲まどうあつても其の金立てねばならぬ事後髪。詞此のまゝに立退かば。嗚やしやんせ。ア、いやゝゝ。おれはもうになり。請合ふ事は請合ふたが。土か跡にて女房が。何にも知らず見捨てた酒どころではないわいのと。地どこや砂か見る様に百兩といふ大枚の金。早

速調ふ當てもなし。いつそ毒喰はゞ皿。と。ちつとは又女房の心推量してくれが。ちよつとお目にかゝり度うござり
アノ鉦八めを斬殺し。エ、サコリヤ。サ。たがよいと。夫思ひの一筋に聲も得上りますと。地言へどこなたは耳にも入れ
さうも思うて見たが。また外に工面くめんの。げぬ。フシ忍び泣き。地夫も不便の涙す。調通つて下さんせ。エ、何ぢやや
仕様もあらうかと。今その思案最中と。を隠し。調それ程に迄おれが事。思うら邪魔らしい奉加ほうかどころかいな。私が
語る夫の今の間に。降つて湧いたる身てたもる志。悪うは受けぬ嬉しいぞや。所は宗旨が違ひます。地と胸のもや
の難儀。妻も途方に。くれは鳥。たゞ。コレおりやモ何もかもよう得心して居しもや愛想なき。調イヤ左様な者では
涙ぐみ。居たりしが。日頃夫の突詰め。る。ム、そんならは何事も。聞分けて下ござりませぬ。私は江戸吉原の女郎屋
し。心をそれと汲取つて。調エ、やく。さんしたか。エ、嬉しうござんす。九つでござりまするが。鉦八様に御相談仕
たいもない與右衛門殿。何のママ百兩迄はまだ間もあり。一寸延ぶれば尋延ひんえん掛けました奉公人。金持つてこいこ
やそこらの金。其の様に苦にさしやん。びる。ママく奥へござんして酒でもた様に待つて居るとおつしやりました
す事はないわいな。又よい思案もござ一つ飲ましやんせ。又よい思案も出よが。ハテ面妖めんような。どつちへお出でなさ
んせう。コレ短氣をやめて下さんせえ。ぞいなと。フシ奥へ勧める女房の顔。見れました。どうぞお目にかゝりたいも
お前のその短氣故。人をあやめて。コ。衛門は。フシしをく立つて入る跡へ。果。我が身を賣つて百兩の。金調へる手
リヤ。サアもし其の事が顯はれてどん。成は。フシさすがそれ屋と門口から。どうで見える鉦八様。道入つてお待ち
な憂目に遭はしやんせうかと。ほんに。成は。フシさすがそれ屋と門口から。どうで見える鉦八様。道入つてお待ち
夜の目も合はぬわいな。地サハリ今この。成は。フシさすがそれ屋と門口から。どうで見える鉦八様。道入つてお待ち
日陰の身となつたも。皆こなたさんの心。様とはこなたでござりまするか。鉦八様。魔ながら。ヤ御免なされませと。地知ら
から。若しもの事が。あつたらば跡に。残つたわしが身は。どの様にあらうぞ。といふお方がお前様にと承りましたぬ人にも取入るは。商賈筋の上手者。

累は臨へたばこ盆。いひ寄る機会にッ
ッ茶を差出し。『イヤ申し。お前はア
ノ吉原の女郎屋さんでござんすか。そ
んならお前に折入つて。お頼み申し度
い事がござんす。といふは外の事でも
ない。夫が手詰めの難儀につき。急に金
の入る事があつて。身を賣りたいとい
ふ人がござんすが。今いうて今相談が
出来るものでござんすかいな。イヤも
うそれは商賣づく何時でも談合出来ま
する。そしてまあ其の本人の年頃は。
アイ十七八でござんする。ヨシ。類の
住居立入れの様子。サア顔形風俗は大
阪でいうて見ようならば。歌舞伎芝居
の野郎によう似てござんすといふ。そ
れはけうといひ物ぢや。どうぞわしが
直す一間より。何心なく出る奥右衛門。
方へ相談を極めませう。そして金の望
みは。マア百兩にさへ買うて下さんす
りや。年は五年が十年でも。それに厭
しやお前に願ひがある。聞屈けて下さ
ひはござんせぬ。ヤモ今の咄の通りな
ら。随分百兩に買ひませう。幸ひ金は
持つて居る。相談さへ極つたら直ぐに
連れて去にたいもの。そんならさうし
て下さんせ。シタガ今いふ通り夫のあ
鏡が見たうござんす。ヤ何といやる。
身。互に得心づくの上。暇乞ひす
る其の間。アレあの納戸で暫しが内。
男。納戸へこそは入りにけり。『ッ累
は跡を見送りにて。手詰めの金の今の
に。つい調うて嬉しやと。思へば悲しき
要き別れア、是とても男の爲。』
『さてそなたに勤め奉公さして。兄の戸平へ
立つものか。サイナ。それぢやに依つ
もの事に潔よう。夫に泣顔見せぬのが。
此の身の置土産と。』
『ッ氣を取て暇の状態。暇下さんせ奥右衛門殿。と
直す一間より。何心なく出る奥右衛門。
顔を見る目も塞がる思ひ。押隠して。
傍へ寄り。』
『イヤ申しこちの人。わたし嬉し
いと思ふ心を推量して。可愛
しやお前に願ひがある。聞屈けて下さ
と思つて下さんせと思はずわつと聲立

てゝ。取付き縋る蔦の葉の。袖に柵む憂
右衛門殿。さつきにお前にいふ通り。短
き涙とどめ。フシ兼ねたるばかりなり。
氣を出して下さんすなと。いふ間もせ
はしくサア申し。早う／＼とせつかれ
居ながら。どう狼狽へて泣いたやら。
て。代官アシ所へと出でて行く。後影
さへ名残かと。見やる目に湧く雨涙。
年の立つ間は。射る矢より。早う戻つ
しを／＼立つて押入れの。冬の支度の。
て元の女夫。必ず／＼それ迄は。健で暮
して下さんせと。つらい苦界へ身を賣
るより昔に變る面ざしとも。何にも知
らぬ心根が。その百倍のいぢらしさ。
五體をしめ木に締付けられ。油拔かる
る。フシ憂き涙とどめかねたる折から
に。息せきと來る村の歩行。申し
／＼與右衛門様。山名宗全様から繪姿
を以つてお尋ねなさるゝ者がある。今
ござりませと。お代官の言付け。サア
／＼今ちや／＼とせり立つれば。は
つとばかりに與右衛門が重なる思ひは
今を的。胸を据ゑたる魂の。一腰ぼつ
込み立つれば。コレ待たしやんせ與
ませうが。シテマアその奉公人は。ア
右衛門殿。さつきにお前にいふ通り。短
氣を出して下さんすなと。いふ間もせ
はしくサア申し。早う／＼とせつかれ
て。代官アシ所へと出でて行く。後影
さへ名残かと。見やる目に湧く雨涙。
年の立つ間は。射る矢より。早う戻つ
しを／＼立つて押入れの。冬の支度の。
て元の女夫。必ず／＼それ迄は。健で暮
して下さんせと。つらい苦界へ身を賣
るより昔に變る面ざしとも。何にも知
らぬ心根が。その百倍のいぢらしさ。
五體をしめ木に締付けられ。油拔かる
る。フシ憂き涙とどめかねたる折から
に。息せきと來る村の歩行。申し
／＼與右衛門様。山名宗全様から繪姿
を以つてお尋ねなさるゝ者がある。今
ござりませと。お代官の言付け。サア
／＼今ちや／＼とせり立つれば。は
つとばかりに與右衛門が重なる思ひは
今を的。胸を据ゑたる魂の。一腰ぼつ
込み立つれば。コレ待たしやんせ與
ませうが。シテマアその奉公人は。ア
イ私が事でござんすわいな。エ、何を
じやら／＼と。サア／＼氣が急きま
す早う頼みます。イヤ申しじやら／＼
ではござんせぬ。眞實誓文私が身を賣
るのでござんすわいな。エ、こなさん
は／＼そりやマア何を言ふのぢやぞい
の。ソレさつきに言はんした野鹽とや
すわいな。ヤア此の人は氣が遠うたさ
うな。ム、そんならこな様が野鹽か。こ
いつは胡麻鹽が聞いて呆れるわい。こ
れいなうこな様を誰がマア惣嫁にも欲
しがる者はないぞや。ア、そりやマア
何で其の様に。何で其の様に厚かま
しわ。あんまり呆れて物が言はれぬわ
いの。ハア貴様こりや鏡見た事はない
の。アイちと様子がござんして。鏡見る
事ばならぬわいな。ム、いか様さうで
生れてから鏡見た事はある

まい。コレこなたの顔の容體ようたいを言うて、せめてお脚あしで腹癢はらよと。泣入る累つらを踏ふりが氣にかゝり是が迷ひの種となり。聞かそか。ぐるり高のちよつぽり鼻はな。顔飛とばし、フシ足を早めて立歸る。地跡ぢせきはよう浮まぬでござんせう。可愛と思うにべつたり痣あざがあつて。しかも出齒でばで。正體泣き崩折ふしれスエテ顔も得上げず。居て折ふしの。御回向ごかう頼み上げますと口横から糸が見えて。其の代りに皺しわときたりしが。ア、思へばく恥かしや。設しやき立てく、フシ絶え入る。ばかりにて居る。エ、ヤエ、も涙じわいの。幸斯ういふわしが顔故に。鏡を見せぬ夫泣き盡す。地沈ちぢむ重おもりと邊あたりなる。刈豆かりまめ薮やぶひ爰こゝに髪かみ拔ひ鏡かがみ稀うす有ありけん御面相。と。の心。其の顔もせず朝夕に。可愛がつ。つくりと見やしやれと懷より取出しやて下さんした。お情過ぎて情なや。なし仕損しとんぜば身の恥と。見廻すあたりに腹立ちに差付くれば。思はず初めて打明うちあけて有様に。言うて聞かせて下錆さびびもせでオクリ研を立て。鎌は今宵置く。見る顔に。はつと悔りまだ外に人も居さんせぬ。また姉様あねさまも胸むね怒おこる。現在の草葉の露と消えよとか。いと哀れをるやと見廻せば。我ならずして面影は妹を是程までに。憎いかえ。斯ういふ添へに來る。フシ降る秋雨の。足音によもやと又も取上げて。見れば見る程事とも露知らず。今の今迄わしが身で器量自慢をして居たが。恥かしいやら。えてある女房ども。累つらと與右衛情なや。コハそも如何に悲しやとあ器量自慢をして居たが。恥かしいやら。門が。摺れ違さうたる門の口。調誰てうたれちや。なたへうろくこなたへ走り。狂氣の。與右衛門殿。どうマア顔が合はさるう。誰たれちや。そこへ出るのは累つらぢやないか。如く身を問え鏡をはつしと打付けて。與右衛門殿。どうマア顔が合はさるう。誰たれちや。そこへ出るのは累つらぢやないか。我が身をどうど打倒れ聲をばかりの叫せめて夫と同じ名の。絹川へ身を投げ。地といふ聲跡に聞きさして。女心の一び泣き哀れにも又いちらしき。調エ、て。死ぬるは未來で連添ふ心。とは言筋に倒たふけつ、フシ轉まびつ走り行く。地ハ忌々しい隙ひまづひやし。イヤモ此の様なひながらさつぱりと。思ひ切られぬ惚おとテ怪しやと見る影は。慥に女房と思へ化物を百兩は扱あて置いて。米一升でもれた中。死んだ跡では美しい。女中をども。あやも分らぬ眞の闇跡を。慕う買手はないと。つぶやきく立上り。女房に持たしやんしよと。そればつかて三更さんせい駈かり行く